

特集

## 純真学総合

松田 洋和

純真学園大学 教務部長

Introduction to JUNSHIN education

Hirokazu Matsuda

Director of the Instruction Department  
Junshin Gakuen University

### 【要旨】

現在の複雑化・高度化・専門分化した医療に対応できる人材育成には、専門的知識や技術の修得はもとより、医療人に共通して求められる基盤的な資質を養う全人的医療人教育が重要と考え、本学では、建学の精神が問いかける「ひとの生き方の理想」である「気品」「知性」「奉仕」の精神を具現化するとともに、豊かな人間性や感性を兼ね備えた医療人の育成を目的とした教育プログラム『純真学』を創設した。純真学は、学科の枠を超えて全学的に取り組む共通教育科目に区分される科目群で、「純真学入門」「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」「総合純真学」の計6科目より構成され、展開年次を1年次から3年次までとし、修得すべき内容を考慮して必修あるいは選択科目として学ぶことを特徴としている。本稿では、主に「純真学入門」「社会人セミナー」「総合純真学」の具体的な内容を含めた純真学の概要と、純真学の学びを通じた医療人育成について述べた。

キーワード： 医療人育成、全人教育、建学の精神、具現化、カリキュラム



松田 洋和

### 緒言

21世紀の本格的な少子高齢社会を迎える中、社会の医療に対する要望はますます高まっており、現在の複雑化・高度化・専門分化した医療を支える医療人の育成は重要な課題の一つとなっている。文部科学省「21世紀医学・医療懇談会」の第1次～第4次報告<sup>1)</sup>において、21世紀に向けた医療人育成についての提言がまとめられ、この中の第1次報告「21世紀の人の命と健康を守る医療人の育成を目指して」では、特に豊かな人間性・深い教養・医療人としての倫理性について改めてその重要性が強調された。さらに、期待される医療人の育成方策として、『医療人には幅広い教養をもった感性豊かな人間性、人間性への深い洞察力、社会ルールを理解、論理的思考力、コミュニケーション能力、自己問題提起能力、自己問題解決能力などをもつことが求められており、このような資質を育てることは医療人育成を考えるにあたっての根本であり、そのためには人間的な熟成を促し、幅広い教養を身につけさせるための教育を行った後に、医療に関する専門的な学習を行うことが望まれる』ことが確認された。これら提言は、現在の医療に対応できる専門的知識や技術の修得はもとより、感性豊かな人間性や深い人間愛をもった医療人の育成には、医療人に共通して求められる基盤的な資質を身につける全人的医療人教育が重要であることを示しており、それに応えるためには従来の教育を超えた新しい教育への改革が必要であるといえよう。

2011年4月に開学した本学は、保健医療学部には4学科（看護学科・放射線技術科学科・検査科学科・医療工学科）を擁し、それぞれ看護師・保健師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士の各医療

専門職を養成する教育を展開しており、2015年3月に第1期卒業生を社会に輩出した。同時に、大学としての完成年度を迎えるにあたって、学生により主体的な学びの姿勢や意欲を身につけさせ、社会に求められる汎用的能力の育成を目的に保健医療学部のカリキュラムの改正を実施した。また、カリキュラム改正に合わせ、建学の精神を具現化する全人的医療人教育の一環として、「純真学入門」「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」「総合純真学」の計6科目からなる本学独自の教育プログラム『純真学』を正課カリキュラムとして導入した。本稿では、主に「純真学入門」「社会人セミナー」「総合純真学」の具体的な内容を含めた純真学の概要と、純真学の学びを通じた医療人育成について述べることとする。

## 1. 建学の精神「気品」「知性」「奉仕」

本学の母体である学校法人純真学園の歴史は、半世紀以上前に「学校法人純真女子学園」が設立されたことに始まる。学園祖の福田昌子は、東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）卒業の医師で、昭和22年に女性として初の衆議院議員の一人となり、「優生保護法」「衛生検査技師法」「診療エックス線技師法」の議員立法に尽力するなど、保健医療の分野において少なからぬ功績を残した。政界引退後の昭和31年4月、「時代の要望に即応し、高い知性と豊かな情操とをもって、社会、家庭に歓迎され、敬愛される良識ある人材を訓育する」を学則に掲げて「純真女子高等学校」を開設、翌年には「純真女子短期大学」を開設し、建学の精神を「気品」「知性」「奉仕」という、いつの時代にも共通する「ひとの生き方の理想」を簡素な言葉で表した。

「気品」とは、「知性」とは、「奉仕」とは、様々な解釈ができるが、本学では以下のように捉えている。

### ①「気品」

「気品」を備えた人材とは、情緒と理性のバランスを兼ね備えた、内面の美しさを有する人物と考えている。特に、本学において育成しようとする医療従事者の観点でいえば、感性豊かで且つ理性的であること、また個人の内面的な在り方や知的探求心、公共性は不可欠である。上記のような考え方に立って、本学では医療従事者として「気品」を備えた人材を育成する上では、倫理観の育成、教養の充実、情緒の涵養が重要であると位置づけている。

### ②「知性」

「知性」を備えた人材とは、絶えず知の探求に努め、論理的に考え、判断する能力をもった人物と考えている。特に医療従事者の観点でいえば、医学・医療の発展のために、科学に裏打ちされた実践的な専門性を養い、社会の変化に対応できる能力を有することが重要である。加えて、科学的根拠に基づいて考え、判断する能力は、安全な医療を提供する医療人、あるいは実践力を備えた職業人として不可欠な要素である。上記のような考え方に立って、本学では医療従事者として「知性」を備えた人材を育成する上では、教養の充実、専門的知識と技術の修得、科学的に思考する能力の向上が重要であると位置づけている。

### ③「奉仕」

「奉仕」の精神を備えた人材とは、社会や組織における自らの役割を明確に意識し、必要とされる状況においては、進んで他者のために最善を尽くす人物であると考えている。個人の力を超えた大きな目的の達成のためには、個人の事情を優先的に考える人材では成り立たず、より大きな視点から積極的に参画しうる人材が不可欠である。特に医療従事者の観点でいえば、患者の命の前には全てを最優先する気構えがなくてはならない。それには患者の立場に立つことのできる思いやりの心とともに、自らの役割を十分に認識し、他の医療職と協力関係を築いていくことが重要である。上記のような考え方に立って、本学では医療従事者として「奉仕」の精神を備えた人材を育成する上では、職業観および使命感、情緒の涵養、社会に対する理解、コミュニケーション能力の向上が重要であると位置づけている。

表1. 純真学のカリキュラム概要

科目区分		科目の名称	授業形態	必修／選択	時間・単位数	展開年次
大区分	中区分					
共通教育科目	純真学	純真学入門	演習	必修	15時間・1単位	1年次前期
		社会人セミナー	演習	必修	15時間・1単位	1年次前期
		コミュニケーション論	演習	必修	15時間・1単位	1年次後期
		ボランティアとキャリア形成	演習	選択	15時間・1単位	2年次夏期・春期集中
		異文化交流	演習	選択	15時間・1単位	2年次夏期・春期集中
		総合純真学	演習	必修	15時間・1単位	3年次前期

## 2. 『純真学』の実践

本学の学士課程教育は教養教育科目、共通教育科目、専門教育科目の大区分から成り、『純真学』は学科の枠を超えて全学的に学生全員が共通理解しておくべき内容との位置づけから、同じくチーム医療を体系的に学ぶ『チーム医療』科目群とともに共通教育科目に区分される科目群で、「純真学入門」「社会人セミナー」「コミュニケーション論」「ボランティアとキャリア形成」「異文化交流」「総合純真学」の計6科目より構成している（表1）。各科目の展開年次は1年次から3年次までとし、修得すべき内容を考慮して必修あるいは選択科目に分け、且つそれぞれ履修年次・セメスターを指定してバランスよく学べるよう配置している。なお、純真学として開講される科目は全て1単位15時間の演習科目である。

### 2.1 「純真学入門」

「純真学入門」は1年次前期セメスターの入学直後から開講される必修科目で、これらから3年間をかけて純真学を学ぶにあたっての導入科目に位置づけられる（表2）。本科目では、純真学という一連の体系の中で、純真学園大学で学ぶということはどういうことか、そして純真学園大学を卒業して社会に対してどのようなことを成していくか、についての思考力を深めていくことを目的としている。具体的には、建学の精神である「気品」「知性」「奉仕」によって象徴される人物像、建学の精神の解釈と純真学園の歩み、学園祖福田昌子の生涯と事績などを学んだ後、プロ意識や志、人生観、日本文化、国際的視野および教養について学び、各自の考え方を深めていく。授業は、学長自らが「純真学園大学の建学の精神について」「志を持つ、基準を作る」「プロ意識とは何か、創造的な仕事は何か」の導入部分を担当する。続いて、副学長、本学園付属純真保育園園長、本学教授・客員教授といった社会経験・国際経験豊かな教授陣によって、専門家・実務家の立場から「国際的に取り組む」「世界と競争する」「心と言葉」「日本人と日本文化」という内容で、具体的な事例や体験談を交えて講義してもらうことで、リアリティある授業を展開する。

表2. 「純真学入門」シラバスの概要

回	授 業 内 容
1	純真学園大学の建学の精神について
2	志を持つ、基準を作る
3	プロ意識とは何か、創造的な仕事は何か
4	国際的に取り組む
5	世界と競争する
6	心と言葉
7	日本人と日本文化
8	純真学入門とこれからの純真学

表3. 「社会人セミナー」 シラバスの概要

回	授 業 内 容
1	オリエンテーション
2	若者よ、旅へ出よう！～日本津々浦々、世界71カ国ひとり旅で学んだもの～
3	書は人なり～空海の書線に見る、その人間性と芸術性～
4	知の宝庫 図書館へ行こう！新聞を読もう！
5	茶道の歴史と千利休「茶道の世界」（茶道の流派と発展）
6	茶道の心得と実践（作法と茶道具）
7	茶道と「一期一会」 茶祖：利休の教え「利休七則」（人との出会いを大切に）
8	若者よ、感性を研ぎ澄まし、学園短歌・学園俳句・学園詩・学園随筆・学園コラージュを書こう

これらの授業を通して、純真学園大学という私学の持つ建学の精神を理解し、職業観やプロ意識とはどういうものかについて自らの考えを展開できる思考力を身につけ、専門的知識の獲得に向けて教養を学ぶ意味を理解し、自由で幅広い思考体系を養うことの重要性を意識することにつなげる。

## 2.2 「社会人セミナー」

「社会人セミナー」は1年次夏期集中科目として開講される必修科目で、いわゆる一般的なビジネスマナーを身につけるための内容を実施するのではなく、学生自身が今日的な視点から「書」と「茶道」という自国の伝統・文化を改めて捉えなおし、それらの土台にある精神文化の理解を通して、社会人としての基本的な在り方や人格形成に必要な知識、心構えや礼儀といったものを身につけていく斬新な科目展開が特徴である（表3）。「書」をテーマとした授業では、「書は人なり」「知の宝庫 図書館へ行こう！新聞を読もう！」の内容で、普段当たり前前に用いている日本語について、そのルーツや漢字・国字・仮名の持つ意味、古典文学について深く掘り下げながら学び、新たな道理や知識を見出して自らのものにすることにつなげていく。「茶道」をテーマとした授業では、「茶道の歴史と千利休」で茶道の世界について概観した後、「茶道の心得と実践」で実際に茶道を経験しながら作法を学び、続いて「茶道と一期一会」において、利休七則に表されるおもてなしの心や、一つひとつの所作に体现・表現されている「侘び寂び」「一期一会」といった茶道の心、茶の湯に込められた日本人の美意識・哲学・自然観などを探求し、自己の内面を静かに見つめ、品格の向上や礼儀を体得していく。

これらの授業を通して、先人たちの知恵と実践力を身につけるとともに、円滑な人間関係を築く能力と態度を養い、建学の精神の理解につなげる。また、同じく純真学で展開する『異文化交流』科目と併せ、自国の伝統や文化についての価値や意義の理解を深め、そこから自国に対する誇りと愛着を持つことで日本人としてのアイデンティティを確立させながら、広い視野をもって異文化を理解することにつなげる。

## 2.3 「総合純真学」

「総合純真学」は3年次夏期・春期集中科目として開講する必修科目である。建学の精神を具現化する目的で開講した6科目からなる純真学のうち、本科目を除く5科目の受講を終えていることから、純真学の最後の締めくくりとして、学生時代に“一流とは何か”を体験することを目的に市内の文化施設を訪問し、将来に向けての自分自身を啓発する（表4）。具体的には、学生を4～5名程度の小グループに分け、夏期ないし春期の休暇期間を利用してグループ別に市内の古典・伝統・美術関連施設を訪問し、大学では知ることのできない文化施設のもつ存在価値や威信価値といったものに直接触れることで、新たな視点を芽生えさせ、それらを感じることでできる豊かな感性とともに、多様な価値観の育成と向上に結びつける。これらの経験に加え、これまで体系的に学んだ純真学の内容から自身が学びとったことをグ



ループに分かれて総括（まとめ）を行い、学科ごとに報告会を実施して学生同士で多角的な視点や考え方を習得する。

これらの授業を通して、建学の精神である「気品」「知性」「奉仕」について自分自身でその意味を理解・体得し、社会人になるにあたっての人間力・総合力とは何かを理解するとともに、一流とは何かを経験することで、社会人として生きる（学ぶべき）方向性を考えることにつなげる。併せて、純真学で多くの友人と交わることで、社会における人との係わりについて学び、他者の価値観を理解することや、協調性・コミュニケーション能力・主体性などを身につける機会とする。

表4.「総合純真学」シラバスの概要

回	授 業 内 容
1	オリエンテーション
2 3 4 5	文化施設（古典・伝統文化・美術関連）訪問
6 7	グループ報告と討論
8	全体のまとめ

### 3.『純真学』に期待するもの

冒頭でも述べたが、現在の複雑化した医療を支え得る医療人を育成するためには、高度な専門的知識や技術の修得のみならず、感性豊かな人間性や深い人間愛といった医療人に共通して求められる基盤的な資質を身につける教育が重要となる。その教育とは、いわゆる各学科の専門科目による教育だけでは培うことのできない全人教育ともいえるであろう。全人教育とは「知識・技能に偏ることなく、感性・徳性などを重視して、人間性を全面的・調和的に発達させることを目的とする教育」と定義される<sup>2)</sup>ものであるが、それに応えるためには従来の教育を超えた新しい教育への改革が必要であり、この教育を実現しようとする新しい取り組みの一つが『純真学』である。

また一方で、21世紀は新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であるともいわれている。このような時代にあって、様々な変化に対応していくために必要となる『総合的な「知」』が強く求められており、中央教育審議会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」<sup>3)</sup>においても、狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身につけた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、他者との関係を築く力、豊かな人間性の必要性が述べられている。これらを身につける学びの基本姿勢として自主性・主体性が強く求められるところであるが、高等学校までの授業形態しか経験のない大学生にとっては、授業を受け身的に聞き・覚えることが中心となっており<sup>4)</sup>、自ら進んで学修に取り組む習慣を身につけることが容易でないことは周知の通りである。そのような学生に対し、自発的に学ぼうとする意欲を高めるには内発的動機付けが必要であり、その一つとして、それまで未知であった物事や事象に触れるという経験が有用となろう。その中でも特に“一流”を知るという経験は、それらに対する“驚き”や“感動”などの知的好奇心を生み、そこから“考える力”や“探求心”といった学びの原動力へとつながって気づきを高める感性が磨かれ、学ぶことへのインセンティブにつながる良い機会に成り得ると考えるのである。

一流という言葉は色々な場面や機会に用いられ、その解釈も様々あるが、広辞苑によれば、一流とは①その世界で第一等の地位を占めているもの、最も優れている段階。（例）「一流選手」、②一つの流派。（例）「一流を成す」、③他とは違う独特の流儀。（例）「彼一流の書き方」とあり、今回の学ぶことへのインセンティブにつなげる一流という意味では、一流選手に代表される「その世界で第一等の地位を占めているもの」を指している。「一流は一流を知る」という言葉があるように、一流を知ることによ

て他の分野の一流の素晴らしさをもより深く理解できるようになり、一流を知るからこそ初めて二流が分かるものである。例えば、一流の百貨店の中に入れば、売り場スタッフの洗練された接遇をはじめ、ディスプレイの仕方や数々の商品に至るまで、随所に一流としての証が見てとれるであろう。また、「純真学入門」で経験するように、一流といわれる人に会い、一流の人の物事の考え方や捉え方といった一流の思考を知ること、これまでになかった視点が生まれ、このことも学ぶことへのインセンティブにつながる感性を磨く一助となるはずである。同様に、「社会人セミナー」で経験する「書」や「茶道」といった自国の伝統・文化の価値や意義の理解、そして「総合純真学」で美術館や博物館などで普段目にする機会の少ない一流といわれる美しい作品に触れることも、新たな感性を磨き、何かに気づく良い機会となるはずである。

このように、各学科の専門科目による教育だけでは培うことのできない医療人に共通して求められる基盤的な資質を身につけるための、そして新しい考え方や一流を知ることで感性を磨き、学ぶことへのインセンティブにつなげようとする“従来の教育を超えた新しい教育への改革”の一つとして位置づけられるのが、本学における『純真学』なのである。これら純真学の学びを通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につけるとともに、既存の枠にとらわれない多様な価値観から生まれる新たな視点で物事を捉えることのできる感性豊かな人間性、人間性への深い洞察力、コミュニケーション能力などを備えた21世紀に求められる医療人の育成を目指すものである。

## おわりに

実質的な大学全入時代を迎え、大学生における「学習意欲の低下」や「学力の低下」に関する問題が頻繁に指摘されるようになり、これまでのような座学中心の授業形態では学修成果が見込めなくなった現在、大学は教育の場としての質的転換を強く迫られていることは論を俟たない。平成20年度の中央教育審議会「学士課程答申」<sup>5)</sup>では、学士課程共通の学修成果として“学士力”の育成と、知識だけでなくその活用力を備えた学生の育成が求められたことは記憶に新しい。また、平成24年度の「質的転換答申」<sup>6)</sup>では、「アクティブ・ラーニング（能動的学修）」をキーワードとして、より具体的な形で大学教育の質的転換が唱えられた。この答申によれば、アクティブ・ラーニングとは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」のことで、学生から質問を引き出してコメントを求める、ミニレポートで理解度の確認をするなどの初歩的工夫をはじめ、課題（問題）探求・解決学修やディスカッション・プレゼンテーションなど、学生の能動的学修を取り込んだ学びなどがあてはまる。これら能動的学修を授業に取り込み、アクティブ・ラーニング的要素を増やしていくことが学修効果を上げることは、米国NTL（National Training Laboratories）によるラーニングピラミッド<sup>7)</sup>によって明確に示されている。その研究によれば、様々な形態の学修を通して学んだ内容を半年後にどれだけ記憶しているかを比較したところ、一方的な講義を聴いただけの場合は内容の5%しか覚えていないのに対し、読む作業が入ることで10%、視覚的教材を使うと20%、実演や実習が入ると30%、グループで討論すると50%、自ら体験すると75%、他者に教えると90%といった具合に、アクティブ・ラーニングの要素が強まるに従って、平均学修定着率（Average Learning Retention Rates）が上がっていくことが分かる。このように、アクティブ・ラーニングの観点からも、その要素を多く取り入れた『純真学』の展開は、知識基盤社会を生き抜いていくための汎用的能力（ジェネリックスキル）育成の一助として、その効果が期待できる。併せて、純真学では本学の建学の精神が問いかける「ひとの生き方の理想」について、単なる知識としてではなく現代的な課題として捉えさせ、抽象的でないリアリティのある演習科目として実施することで、学生にとっては建学の精神をより身近なものとして捉えることのできる契機となる側面も持ち合わせている。学生にとって自学を理解するということは他大学との違いが分かり、それが“安堵感”につながるとされており<sup>8)</sup>、それら自

校（自学）理解から大学への帰属意識や愛校心の涵養をも期待するものである。新たに創設した『純真学』の実践によって、純真の心で「人・医療・未来」を信じ、伝えることのできる「気品」「知性」「奉仕」を兼ね備えた医療人を一人でも多く社会に輩出できるよう、全学をあげて取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 1) 文部科学省「21世紀医学・医療懇談会」第1次～第4次報告． 1996～1999.
- 2) 小原 國芳． 全人教育論． 1969． 玉川大学出版部．
- 3) 中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」． 2008.
- 4) 本山 智敬． 1年次演習科目におけるグループワーク導入の試み． 福岡大学研究部論集 A10; 25-34: 2010.
- 5) 中央教育審議会大学分科会答申「学士課程教育の構築に向けて」． 2008.
- 6) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」． 2008.
- 7) Letrud Kare. A Rebuttal of NTL Institute's Learning Pyramid. Education 133; 117-124: 2012.
- 8) 寺崎 昌男．自校教育の役割と大学の歴史—アーカイブの使命にふれながら—．金沢大学資料館紀要 5; 1-17: 2010.